

中学1年2組 社会科学習指導案

指導者 前島美佐江

1. 単元名 結桶革命！ ～結桶から中世後期の社会変化をさぐる～

2. 授業の構想

(1) 本学級は、男子17名女子18名の35人学級である。歴史が好きな生徒が多く、大変意欲的に学習に取り組んでいる。中学1年生の歴史学習はそれまでの人物中心の歴史から通史へと変わるために、どのように歴史学習に取り組むかという姿勢を方向づける大切な時期だといえる。1学期は、広い視野で抽象的な概念として「律令制」をとらえることを目指して歴史の授業をおこなった。学習前に「律令制」についてイメージマップを書かせたところ、「きまり」・「規則」といった断片的な認識にとどまっていた。また、聖徳太子の政治や中大兄皇子のおこなったことについてはよく知っていたが、それらの連続性や関連性についてまでは認識が及んでいなかった。そこで、中学校では社会認識を深め時代を大きく捉えるために「天皇を中心とした国をつくるために」という「中核となる視点」のもとで、子どもたちに身につけさせるべき知識・技能を明確にした単元構成をおこなった。また、それらの知識・技能を活用する場として調べ学習や発表などの学習活動にも取り組んだ。調べ学習を進めていく中で新たな知識を習得したり、その知識をもとに、自分たちでさらに資料を見つけわかりやすい発表の工夫が見られた。次の文章は、学習の最後に「律令制」について意見を書かせたときのある生徒の意見である。

役人が社会を動かしたり、きまりによって国を治めるしくみをつくったことは「当時としてはよくやったな」と思うが、農民への負担の比重が少し重かったと思う。農民たちがかわいそうな気もするが、国を責める気にはなれない。人をまとめることは本当に難しいと思う。農民たちの負担の上に国の力を高めていかなければ他の国に攻められていたかもしれない。そうなったらもっと人々は大変だったと思う。

この文章からは事実・事象を関連づけたり、意味づけたりし、貴族や農民といった異なる立場から「律令制」を総合的にとらえることができ、学習前とくらべ社会認識が深まった様子がうかがえる。

本単元の室町時代について、小学校学習指導要領では「京都に幕府が置かれたころの代表的な建造物や絵画について調べ、室町文化が生まれたことが分かること」と述べられており、子どもたちは文化から時代にせまる学習を通じて、今日的生活文化に直結する要素を持つ文化がこの時代に生まれたことを学習している。よって民衆の立場からの歴史や経済からみた歴史は中学校で初めて習うことになる。通史として歴史を学習していくためには、民衆史や経済史からの視点が不可欠であり、歴史を大きくとらえる授業をくり返しおこなう必要があると考える。1学期から、資料の読み取りの学習に取り組む中で、比較したり関連づけたりする力を徐々に培ってきており、本単元では、さらにそれらを活用し、資料から考えを深める学習を通じて社会認識を深めたいと考えている。

(2) 本単元では、14世紀から15世紀にかけての中世後半(おもに室町時代)を扱う。この時代の特色としてまず産業のめざましい発展とそれに伴う民衆の成長があげられる。結桶に代表される道具の発達、大量生産と需要を生み、さらには輸送業の発展や職人の自立などさまざまな分野に影響を与え、相乗効果により産業が飛躍的に発展し、都市や惣村の自立も促された。また、さまざまな職業の登場や貨幣経済の浸透により身分の流動化がおり、また不安定な政治権力の中で、実力でのし上がる下剋上の風潮がおこった。そのような中で、自分たちの権利は自分たちで守る自力救済の意識も高まったと考えられる。よって、この単元では、東アジアと深く関わりながら武家政治が広く展開されていくなかで、経済の成長を背景に庶民の台頭や地域の発展が著しかったことを理解することをねらいとしている。その上で、下剋上の風潮など新しい力が登場してきたさまざまな要因を子どもたちが考える学習を通して、自力救済の時代という特色を大きくとらえることをねらっている。地方や民衆が本格的に歴史学習に登場してくるのが、この時代からである。歴史的事実や事象間のつながりも多岐に

わたり複雑になるこの単元で、民衆の立場や経済の視点からも関連づけや意味づけをおこなう力をさらに培っていくことは、人物史から通史で歴史をとらえることに慣れてきたこの時期の1年生にとって大切であると考え。

上記のねらいを達成するために、時代の特色を掴む上での「知識のまとめ」とそれにせまるための「中核となる視点」を明確にし、それにもとづいた学習内容で構成する授業をしていきたいと考える。習得させるべき「知識のまとめ」を「政治権力のゆるみ」「経済の発達」「民衆の台頭」とし、それらをとらえさせるための「中核となる視点」をそれぞれ「貨幣」「結桶」「一揆」と考えている。

- (3) 本単元の展開にあたり、単元の学習の前後や途中でイメージマップ（「中世」）を描かせ、子どもたちに自分たちの認識や認識の深まりについてとらえさせたいと考えている。小学校の学習では、文化を中心に学習しているため、最初のイメージマップには金閣や雪舟といった断片的な用語が表れると思われる。そのイメージマップの用語が増え、相互に関連づけ網の目のように広がっていくさまが、社会認識の深まりを表すものだと思う。そのためにも習得させるべき知識を明確に持って授業をおこなうことが重要だと考える。

また、本単元ではイラスト、写真、挿絵、エピソード等の資料を有効に用い、子どもたちが歴史的イメージを持ちやすい授業にしたいと考えている。本単元では「イラスト中世（15世紀）」（歴史教科書：帝国書院）を中心資料に据えたい。この資料は絵巻物や遺物等を根拠に15世紀の博多の町が生き生きと描かれており、この時代の特色を子どもたちに視覚的にとらえさせ、イメージをふくらませるのに格好の資料だと思う。

第1次では、テーマを「15世紀の日本社会へのタイムスリップ」とし、子どもたちに15世紀の日本社会の特色をおおまかにつかませたい。「イラスト中世（15世紀）」から子どもたちにさまざまな事実・事象を読み取らせ、これからの学習を通じて引き出した事実・事象の結びつきや意味づけを考えていくのだという、学習の見通しをもたせたい。

第2次では、テーマを「発見！北海道から大量の古銭が！大量の古銭は中国銭！」とし、北海道から大量の古銭が出て来たというエピソードから、子どもたちに「①なぜ北海道から大量の古銭が出てきたのか」「②なぜそれが中国銭だったのか」「③なぜ、室町幕府は貨幣をつくらなかったのか」といった①②③の問いから導かれる学習を通じて、「政治権力のゆるみ」といった「知識のまとめ」をとらえさせたいと考えている。埋蔵されていた古銭の数は推定50万枚で日本一である。この事実から、日本海貿易の終点港としての十三湊の繁栄やアイヌの人々の交易での活躍を実感させ、交易の形も地方から中央へという形だけでなく、地方から地方へという新しい形も盛んになったことに気づかせたい。「イラスト中世（15世紀）」で貨幣が使われている部分を取り上げることから学習に入り、交易の発達や貨幣経済の浸透がうかがえる部分を随時取り上げることで、このイラストを活用したい。

第3次では、テーマを「結桶革命！容器が日本の社会を変える！」とし、「結桶の登場による社会の変化」を考える学習を通じて、「経済の発達」という知識のまとめをとらえさせたいと考えている。ここではおもに技術革新とそれに伴う産業の発達を中心に学習していくが、その際に結桶を用いて子どもたちに具体的にとらえさせたい。この結桶は当時の産業の発達の立役者ともいえる最も象徴的で魅力的な教材の一つと考える。

本時はここでの第1時間目である。酒を入れて運搬する場合、瓶と結桶のどちらが主流になるかを考えさせる。「イラスト中世（15世紀）」には、瓶を2人で重たそうに運んでいる様子、結桶で井戸から水を酌んでいる女性、専門の結桶職人の存在等、考えるヒントがたくさん描かれている。強度・耐久性・密閉性・大きさの自在さを持った結桶の登場で、日常生活はもちろんのこと、貯蔵・運搬業に変化を与え大量生産・大量輸送を可能とし、職人の自立も促し、それらが相互に絡み合い産業全体が飛躍的に発展したことに気づかせたい。

第4次では、テーマを「支配者 VS 民衆、勝つのはどっち？」とし、民衆が自分たちの権利を守るために団結しはじめたこと、自分たちの利益を守ってくれるリーダーとして才覚のある人物についていったことを考える学習を通じて、「民衆の台頭」という「知識のまとめ」をとらえさせたいと考

えている。本単元の最後には、これまでの学習をふり返り、室町時代はどのような時代だったのか自分の考えをまとめさせたい。その上で、子どもたち一人ひとりが戦国大名になったつもりで、領国の秩序の安定と経済の発展のためにどのような政策をとるのか考えさせ、次の近世の学習へ目をむけさせたいと考えている。

3. 活動展開計画 (全8時間 本時5/8)

次	主な学習活動	時	具体的な学習活動
1	15世紀の日本へ大仏スリッパ	1	・15世紀の日本社会の特色をおおまかにつかむ。
2	発見！北海道から大量の古銭が！大量の古銭は中国銭！	2	・北海道から大量の古銭がでてきた理由について話し合う。
		3	・大量の中国銭はどうやって日本に入ってきたのか考える。
		4	・日本で貨幣が造られなかった理由について考える。
3	結桶革命！容器が日本の社会を変える！	⑤ 6	・結桶の登場による、社会の変化について考える（1）。 ・結桶の登場による、社会の変化について考える（2）。
4	支配者VS民衆、勝つのはどっち？	7	・民衆の団結！自分たちの利益を守るために。
		8	・戦国大名の出現！新たなリーダーを求めて。

4. 本時の学習

(1) ねらい 結桶の登場と、生活・産業の発達を関連付けて考え、この時代の産業の飛躍的な進歩と職人の自立といった社会の変化について予想することができる。

(2) 展開

学習場面と子どもの取り組み	教師のはたらきかけと願い
<p>1. 「イラスト中世(15世紀)」の中で、どのような容器(入れ物)が描かれているか見つける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・瓶や曲げ物、結桶、升、かごが容器として使われていた。 <p>2. 室町時代の酒造りの発達について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・酒を飲むことが広まったんだな。 ・各地で酒が造られるようになったんだな。 ・酒造りで儲ける人が出てきたな。 <p>3. 本時のめあてを確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>結桶か瓶か？容器から産業や人々の生活の変化について考えよう</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・瓶は蓋もできて輸送に便利そうだな。でも、瓶はずいぶん重たそうだな。 ・結桶は井戸や水撒きに使われている。耐久性があるんだな。 <p>〈結桶の登場による社会の変化について〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・巨大な酒樽や醤油樽が登場し、大量生産が可能になったな。 ・船に樽を重ねて積んでいる。たくさん船に積むことができるようになったな。 ・片手間に作るのではなく、専門の結桶師がいる。 <p>4. 今日の学習をふりかえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この時代の産業の発展はすごかったんだな。 ・結桶職人以外にはどんな職人がでてきたのかな。 	<p>教師のはたらきかけと願い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イラストの中でどのような容器が描かれているのか気づかせ、当時の生活への関心を高めていきたい。 ・実物を見て、触れることによってイメージが湧きやすいようにする。 ・結桶と産業の発達という変化に気づかせていくために、この時代の酒造りの発達を示し、さまざまな容器の中でも、結桶と瓶の2つの容器にしぼって考えさせる。 ○強度・耐久性、運搬のしやすさ、水物を入れることができる、自由に大きさを変えることができる等々の利点を兼ねそろえた容器が結桶であったことにイラストから気づかせたい。 ○大量生産と運送業の発展の相乗効果によってさらなる産業の発展と職人の自立など社会の変化を引き起こしたことに気づかせたい。 ・本時の学習についてふりかえりを書かせることで、自分がどれだけ理解できたかを自覚させるとともに、できたことを認めていきたい。